この内容は、suwazo が 2010 年 2 月～2013 年 5 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちの 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2013 年 5 月

雪の女王と氷の女王と

twnovel おりぼん
4
～童話編～

アイスバーといっしょに食べよう
ペンギンと
雪の女王と氷の女王と

旅 の途中、きらきら光る狐の襟巻を買った。「お目が高い」と店主。「子狐を、隠には一切あてないで星の夜だけ檻に入れて外に出すんだ。星の光を吸ってこんな美しいモモになる」僕はそれを首に巻く。あたたかい。いつかどこか星の綺麗な草原に辿り着いたら、空へ返してやろうと思う。

「あ たしの本体がどの本か判らない限り手出しなんかやせないわよ」古びた図書館を守る少女の精霊。「判るよ。これだろ？」青年が示したのは歴代図書館長名簿。少女は驚いて泣き出す。「この建物はもう老朽化してるんだ。新しい図書館へ一緒においで。よろしく、僕が新しい館長だ」

世 界中の階段が消えた。悪い魔法使いの仕業だった。旦大階段を昇り、彼は天国で愛娘に別れを告げ、泣きながら階段を降りてきた。早く返せと人々は罵ったが、「傷は死んでも天国に行けぬから」との言葉にしたがい、世界中の階段を繋ごうと再会する。そして娘に刑

星 台に並んでいるのは透明なガラス瓶で、中には一人ずつ人魚姫が入っていた。親指大くらいの小さな人魚姫たち。土産品として人気らしい。「栓は取らないでね」星台の親父が言う。「泡になっちゃうからね」夕陽を受けて、ガラス瓶が光を退ら光る。人魚姫はしゃくりかけてはしゃくり。

世 界にはーつだけ、一度も廻ったことのないメリーゴーランドがあります。どこの遊園地にあるのか、知っている人もいますが決して口には出しません。そのメリーゴーランドこそが世界の中心だから。毎日、廻っているふりをしながら、その実、世界のなをぐるぐる廻っているのです。

通 りかかった幾つもの星に生命の種を蒔きながら、星船は気の遠くなるような長い年月をかけて宇宙を放浪している。いつかこの放たちを目印にたどって、遠い故郷の星へ帰るために。ヘンゼルとグレーテルのように。

死 んだ少女はクローバー畑に埋められた。死んだ少女はクローバー畑の真ん中に座って歌をうたう。これまで何人もの死神が死んだ少女を迎えに行き、誰もが一人で帰ってきた。死んだ少女の編んだ、可愛い白い花冠を頭にのせて。死神たちは皆、花がだれても冠を頭からかさない。

「悪 魔の仔は、まとめて森のお屋敷で育てますの。綺麗な服とお菓子、優しい神様の絵本を与えて。いつか白い羽根が生えたら神様に会えるのよって言って。勿論そんな日は永遠にきません。そのうち自分から勝手に絶望して育てるより最初から堂々と悪魔になりますもの」

王 が待女に産ませた赤ん坊は海に棄てられる。海の民に拾われた赤ん坊は亀の甲羅を与えられ、亀として海で育つ。王と王妃の間に生まれた王子は、月の夜、浜辺に上がってきた亀が甲羅を脱いで美しい少女になるのを見る。裸で夜空に歌をうたう少女に心を奪われる。姉とは知らず。

真 泥棒が現れた！　奴はいつも本の最後のページを破って盗んでいくのだ！「泥棒とは失敬な」彼は静かに首を横に振る。「私は皆様に夢を与えているのです。永遠に続く夢を。果てしない想像力を。そしてそれがもたらす爛かしい未来を」妖艶な笑みと共に、真泥棒は月夜をまる！

白 い石に寄りかかって少女はまどろむ。このひんやりした大理石は大好きなおじさんの墓石。誰もが忌み嫌う吸血鬼の少女に優しくしてくれた。もう一度会いたくて、懸命に探しまわったのだ。おじさんはこの土の下にいる。だから少女もずっとここにいる。じきに朝日がのぼるだろう。

狼 の腹を裂くと、おばあさんと、赤ずきんちゃんと、パンと、ワイン（瓶ごと）と、赤ずきんちゃんのママと、猟師と、花と、石ころと、井戸と、おばあさんの家と、森と、空と、月と、太陽と、大地と、川と、海と、過去と、未来と、歌声と、あらゆるものが生まれ、世界は世界と成った。